

『埼玉教育』一九五六年(埼玉県教育研究所)

最近の社会科教育の動向と問題

矢口 新

一

いわゆる第五次改訂以来、社会科の教育に対する論議は急に静まったかのように見える。第五次改訂は、日本の戦後の社会科に対する探求に、あの意味での終止符をうったという人もいる。それは決していい意味で言われているのではない。とにかく社会科をやる実力のない教師たちに、昔の地理、歴史の線まで後退してもよいのだという自信を与えた(?)という意味で落ち着かせたというのである。中学校においては、あるいはそういうこともあるかも知れない。とくに入学試験の準備をすると呼称して、わかってもわからなくても、書かれた言葉を暗記させるといふ教育ならざることをやろうとする先生方には何よりの援護射撃であったかも知れない。そういう仕事は一番なまけていてもできることである。だから先生はあまり文句を言わなくなった。これが落ちついた原因であるというのである。

もしそうだとしたら何という情ないことであろう。しかし私はそう信じてくはない。私の所には、依然としてより新しい研究と、より進んだ実践の報告がとどけられ、また多くの先生方が、新しい疑問と問題をひっきり訪問される。それらにふれる度に私は社会科の教育の無限の奥行きを知らされ、それと共に、先生方の無限の努力も感じさせられているからである。社会科の教育は前進しつつあるのであろうと思う。

けれども確かに社会科の教育に対する一般的な雰囲気はかわったようである。それに対する評価のいろいろあることは、ともかくとして、その論議のされ方や研究、実践の様相にかなりかわったものが見られていることは認められよう。それがよいと言う人も悪いと言う人も、かわったことは認めているということ、そこにわれわれは意味深いものを読みとることができるのではないか。

それでは変ったのはどこであろうか、それに答えるには、最近十年間の社会科教育の動向を振りかえってみるということをしなくてはならぬわけであるが、今はそれは許されない。その結論的なことだけを言うことになるが、いわゆる活発であった頃の社会科教育に関する論議の内容も今から思えば、問題は主として社会科の理念に関するものであった。例えば問題解決学習と系統的学習との論議がやかましかったが、それも要するに一般的な考え方のことを問題にしていたといつてよいであろう。あるいは道徳教育論議もやかましかったが、それも例えば、社会科の教育の中で全面的に取扱うとか、社会科の理念を守りつつ行うとかいった、主として理念的なことであったといつてよい。その他、カリキュラムの形態とか、単元の構造とか、課題を中心にするとか、いずれも極めて一般論であり概論であったのである。

ところが、実際に社会の学習をさせるにはそれでははじまらないのである。具体的に学習指導の場面に来ると、もつと具体的な内容の問題にぶつかると、そこでの方法論はとても一般論ではやれない。そこで実際には、教科書を教える学習になってしまう。あくまで理念的なことを貫こうとする、もういつペン、その具体的場で考え直し組み立て直さなくてはならない。景気の良い論議を振りまわしていてもはじまらないのである。ここであるいは、教科書学習にもどつた人もいよう。あるいはもつと深い研究と実践を具体の場で展開しようと、沈潜して行った人もいよう。威勢の良い論議がなくなったのは、そういうところに原因があるのではないか。

こう考えると、全体としては、よしといわれる人もあり、あしといわれる場合もあるが、ともかく社会科の教育が歩かねばならぬ。必然の歩みをたどっているようにも思われるのである。そしてともかく、本当の社会科の教育を実現するための努力をし続けることが、我々のなすべき唯一の責任であろう。

二

以上のように考えると、社会科の教育の動向が現在のよう評価される根底には、教師の問題があると思われる。つまりわれわれ教師は、社会というものが、具体的にはまだよくわかっていなかったのである。そういう段階でまず出て来たのは何かというと、方法論であり、形態論であった。そして一番大事なこと、社会の学習とは何かということ、あるいは、社会とは何かということについては、極めて甘い考え方、言いかえれば抽象論しか持っていなかったのである。

ここで社会の学習とは何かということ、あるいは社会とは何かということも、かつて論議されたような、観念的、概念的定義づけを言うのではない。そういうことがわかるといふことは、みずから社会を研究し、なる程社会の学習とは、かくの如くしてなすものか、社会がわかるとは、こういうことがわかるといふことかというように、実践的にわかることである。そういう点については、われわれは考えてみれば甘かったのである。

みずから社会現象をとらえて、これを分析し、構造づけて、社会とはかくの如きものなりという勉強をしたことはない。自分のもっている知識は極めて断片的な常識以下のことも多い。唯一のたよりになるのは、教科書である。しかし教科書も極めて頁数が少ないから、詳しくは書いてない。ただ筋が通っているから今まで知っていた断片的なことが整理されて、位置づけられる。それをたよりにして子供に教えるのである。教える場合に、しかし裏づけになる経済的理解、実践的知識があるわけでないから心細い

こと限らない。こういうことがやってみてはじめてわかったのである。しかしそれがまだわからない人もいるようである。

社会科とは、そこにある社会生活のもろもろの事柄を断片的に教えればよいと考えている人も多い。子供が学校へはいれば、学校中を案内してみせる、だんだん学年がすすむと、郵便局や警察をみせたり、青物市場をみせたりすることだと、それだけしか考えていない人も多い。さまたな社会生活の現象について物知りにならせることだと考えている人も多い。

もちろんそういう具体的な生活の現象を取り扱わねばならぬことは、具体的な社会の事を材料にして学習するのであるから当然であるが、同時に、そこで、社会とは何かということを経験的に学習させて行くのである。成る程こうして社会生活が成り立つのか、「社会」というものを概念としておいて、ものを考えるのは、こういう理由があるのか、ということがわからなくてはならぬ。

例えば郵便局をみても、その中で行われている一つ一つのことを断片的にとり扱われて、それをみて、何をするのかということをおぼえるのではない。それら全体が、社会の生活をどういうように成り立たせているのか、そのための働きなのだというように考えられなくてはならぬ。その辺のことは、以上のような簡単な問題ならわかるけれども、だんだん上学年でむつかしい問題をとりに扱うようになると、焦点がぼやけて来る。

それが一番はつきり出て来るのは、地理や歴史の教育の場合である。さまたな断片的知識を教えるということと、地理や歴史の教育とがすぐ結びついて来るのである。地理や歴史の教育を強調する人の中には、いろいろな考え方の人がいるが、最も多いのは、山の名前や、川の名前をおぼえさせること、それを日本の北から南へ、あるいは世界を東から西へ順々にやっけて行くという考え方である人が多い。いわば昔の国づくしである。それを地誌と称している。こんな地誌の考え方なんてものは、十八世紀的なものであるが、そういう人が依然として多いのである。

日本の社会は、具体的には、日本列島にひろがった社会であって、それは決して一様な自然を地盤にしているわけでない。そこで、生産生活にしても、交通にしても、文化にしても、それぞれの土地と結びついていて様相がみえるのである。空間的にみればそこに社会がより深くわかるのである。やはり社会がわかることがねらいであって、そのために、空間的な取扱いをするのである。社会がわかることは空間的に見るということが大きな要素なのである。

地理的な内容の書いてあるところを教科書で見ると、社会をみつめることが何かうすいようであるが、それは今後改訂されて行かねばならないのである。ヨーロッパやアメリカの地理教科書は、もつとはるかに社会的になっていく。つまり一定の土地における社会の生産や交通や文化を問題にしている。それを空間の側からまとめているだけである。日本の教科書でも、そういう風な見地から分析してみると、生産とか、交通とか、文化とかということがちゃんと中に出てはいる。それが従来の地理の習慣に従って一定の系列に従ってまとめられている。つまり北から南へと、北海道から順々にまとめられている。しかし、その中味は、本当は生産、交通、文化というように社会の機能に即して述べられているのである。ところが教える教師が、そういう視点を忘れてしまつて、ただの断片として、それを教えている。社会がどういふ社会かということ忘れているのである。

三

歴史においてもこの点は同様である。昔の歴史は、人の名前をおぼえたり、事件の名前をおぼえたりしたものだが、それは歴史ではないであろう。時代がわかるというのは時代の名前がわかることではない。社会がわかることなのである。社会がわかるためには構造的にわからなければならない。断片的な事実、例えば関所とはどういうものか、乗りものの種類とかかということはいくら詳しくやつてもだめである。第一そんなことは忘れ

てもいいことである。

日本の歴史の教科書あるいは通史的に書いたところは昔の伝統でそうなっているのだが、どれも社会を構造的にわからせるように書かれていなくて、ただいろいろ事件だとか人物だとか事柄だとかが羅列されているのである。しかしそれでも、こちらが眼をもつてみれば、時代時代について、生産とか消費生活とか、政治とか、文化とかが取扱われ、また相互の関係も構造的に把握しなければ時代というものはわからないということに察することはできるのである。

歴史というとか何かうすいようをやらねばよいように考えているので、すぐ乗物のうすいかわりとか、風俗の変化とかをならべてみたがるのであるが、そんなものは歴史ではない。それは材料であって、歴史はその材料から、うすいかわりというこの意味をよみとることであり、その背後にある社会生活全体の構造、人間の気持、社会としての動きをつかむことなのである。つまり社会というものは不思議なものだということをつかむこと、一つ一つ具体的に即してつかむことだといつてよい。

すべてこれらのことは、教師みずからが、社会科学として、個々の事柄をみずから勉強して、成る程とつかんでいなくてはならぬことである。そういうことがなくて、昔の地理や、昔の歴史を学んでそれを地理、歴史と考えているものが、その常識で、社会科学として新しく考えられている地理的内容や歴史的内容を取扱うのでは、本物にならないのである。

教師はまず社会を具体的に学習しなくてはならぬのではないか。社会を学習するというのは、子供に社会科の単元を設けて学習させるように、やはり今の単元に従ってやるべきである。つまり具体的に、一つ一つ問題をおいて、それを実証的に究明してやることである。生徒にやらせる前にみずから材料をあつめて、自分で整理して、社会とは何かということ結論づけてみるべきであろう。それを空間的にもながめてみる。時間という見地からも見てみる。例えば、農業生産という単元があるが、教師はそれを

教科書にしたがって教える前に、農業生産とは何を具体的に言うのかということや、農林省の統計には、産物とその生産高がどうなっているか、それをみて、これだけのことを言うのか、これだけ日本社会が生産をしているのかと考えた人がどれだけの土地にどのように展開しているのか、それは地理的な研究であるが、そういうことを実証的にしらべた人がいるだろうか。こうして具体的に日本の社会のやっている農業がつかまえて、はじめて、日本の社会の農業生産がわかる。それは日本の社会のはたらきの一面がわかることである。そういうものを生産についても、交通についても、どのはたらきについても実証的におさえてみて、はじめて、子供に何を学習させたらよいかがかかるであろう。

こういう具体的なところに実は大切な問題があるのであって、そこが充実して来なければ、問題解決だろうが、社会の課題だろうが、それは空虚な言葉にすぎないのである。そういう空虚な言葉の遊びにつかれてどうしていいかわからない人は、教科書にもどっているし、もう少し実証的にやろうという人は、新しい地道な単元の教材研究とでもいうべき方向に進んでいるのである。

四

道徳教育ということは最近やかましくいわれるが、これも理論の段階ではもう行き詰りである。社会科をやつていけば、道徳教育になるのではない。そういうこともあるが、それを自覚的にやるのが教育である。それではどうするかといえ、それには、やはり人間の必要な道徳、例えば、かつての教育勅語にあげられていた徳目の如きものを考えてみる必要がある。ただ教育勅語の徳目は、ただ全くの徳の目であつて、内容は何も無い。責任とか、協同とか、社会への奉仕とかいっても言葉であるにすぎない。それを具体的にわれわれの生活場面で考えるところに道徳教育がある。

それには社会科の単元はよい場面を提供してくれる。一つ一つの社会の具体的なあり方を問題にするのだから、そこで人間の行為の仕方を問題にすることができよう。そういう点で社会科の各単元は道徳的知見を与えるよい場所である。

例えば協同というのは、昔は毛利元就の例なんかで矢を三本一緒にしたら折れないように、兄弟三人で助け合えと教えたという話であつた。こんな原始的な道徳教育でなく、今は社会科の単元で、家庭生活も、学校生活も、その他生産の場面も、交通の問題も、政治も保健も、社会保全も、いろいろ取扱うのであるから、それぞれのところで人間はいかに協同したらよいかということが具体的に考えられていくはずである。そこで人間の行為の仕方についての基本的な考え方、倫理も教えることができる。人生観も与えることができる。どの徳目についても、みなこのように具体的に教えることができる。

こういうことを計画的にやる。いわば、各自がこれまでやつて来た単元を検討して、その中へいれて行けばよいのである。そういうことをしないで、ただ道徳教育必要論や方法論をやつてもだめである。むしろ具体的実践から方法論を生み出し、次の理論も生れて来るのである。

現在そういう具体的な実践にはいつている人もだんだん多くなつて来ている。そういう人は、そこでまたみずからも、それを通じて社会を研究して行つているのである。そういう教師の力がたまつて来なくては、社会科は進展しないのではないか。今はエネルギーをためつつある時であると思われ。

(国立教育研究所員)